

謡曲《邯鄲》小考

——遊仙枕説話との関わりを中心に——

松 沢 佳 菜

一 はじめに

作者、成立年代共に不詳の謡曲《邯鄲》は中国古典に典拠をもつものの、典拠とのいくつかの相違点が指摘されている。本稿では、謡曲における盧生の夢中の栄華描写の背景となる説話を分析し、謡曲《邯鄲》を先行邯鄲譚と比較した場合の相違点が何に由来するかを考えてみたい。

二 研究史と問題点の整理

謡曲《邯鄲》は金春禪竹の『歌舞髓脳記』（康正二年・一四五六）に妙花風の曲として掲出するのでそれ以前の成立が確実である。糺河原勸進猿楽における音阿弥初演が記録上の初見。以下に梗概を述べる。

仏道を志す蜀の国の青年盧生が、楚国の羊飛山へ向かう途中、邯鄲の里で宿をとる。そこで宿屋の女主人の勧めに従い、「邯鄲の枕」を用いて眠る。夢の中で勅使が現れ、盧生は楚国の帝位に即き、五十年の栄華を極める。壮大な宮殿や不老不死の酒を契機とする超現実的な仙界の描写が展開されるが、やがて夢は覚め、宿の女主人が粟飯の炊けたことを告げる。盧生は五十年の栄華も一炊の夢の間のことであった、この枕こそが人生の師であると悟り、枕に感謝して故郷へと帰る。

伊藤正義氏によれば^①、『邯鄲』の原拠である『枕中記』（唐・沈既濟）には、『太平広記』（八二）所収のものと『文苑栄華』（八三三・記三七）所収のものがあるが、どちらも大差はなく、盧生と道士呂翁を登場せしめる。内容は盧生という若者が邯鄲の客舎で道士の呂翁に枕を借りて眠り、夢中栄華を極めた話であって、『邯鄲』

がこの話を大元としていることは疑いない。だが二作品を比較した時、『枕中記』が『邯鄲』の直接の本説とは言えないということが、『邯鄲』研究史においてしばしば指摘されている。『枕中記』の盧生の夢の榮華は、進士に及第して出世コースに乗り、時に同僚にねたまれて左遷を経験したりする中でやがて宰相に上り詰める、というように当時の政治制度に則った現実的な榮華の描写がなされるからである。

また一方で本邦における邯鄲譚に『太平記』巻二十五「自伊勢進宝劍事、付黄梁夢事」がある。またこれと密接な関係にある資料として静嘉堂文庫本『和漢朗詠集和談抄』（応永二年の年記）があり、仙家「壺中天地乾坤外 夢裏身名旦暮間」に施された注が『太平記』とほぼ同文である。

伊藤氏はこれらの系統の資料について次のように述べる。

そこでは、たとえば盧生の名を示さず「富貴を願う客」が「楚国の君賢才の臣を求め給ふ由と聞きて、恩爵を貪らん為」の道中の出来事とするのをはじめ、『枕中記』等と大幅に異なる話となっている。『邯鄲』がその系統の資料の影響下にあることは、楚の国名を用いたことをはじめ、頭注に指摘したとおりではあるが、しかしそれだけに基づいているわけではないことは、シテを盧生とすることからも明らかである。さらに『邯

鄲』は先行の邯鄲譚を独自の構想下に整えている。

つまり日本における先行の邯鄲譚と比較した時の謡曲『邯鄲』の特異性は、『太平記』「自伊勢進宝劍事、付黄梁夢事」との類似点と相違点を検討することで指摘しうる。

伊藤氏は先行の邯鄲譚と謡曲との相違点を簡潔にまとめている。

即ち盧生を一大事の因縁（仏道）を志す者として設定すること、道士呂翁を除き、宿屋の主人（アイ）に置き換えたこと、夢中の榮華が『枕中記』や『太平記』などと大きく異なり、天子即位、宮殿の華麗、都城の繁榮、不老長生、仙家の歛樂、登仙の実現と畳み上げて描き、その絶頂での覚醒となること、などがその主要点であろう。

ではここに指摘されるような、謡曲の夢中描写の特異性は一体何に由来するのだろうか。以下、この問題について帝王遊仙及び四方四季などの観点から考えてみたい。

三 夢中での即位と遊仙について

『邯鄲』における夢中の描写が、謡曲以前の邯鄲譚には見られない構成をもっていることは伊藤氏の指摘する通りである。ここでは謡曲独自の設定とされる、盧生の皇帝即位と遊仙描写について分析を行う。

(二) 遊仙枕と帝王遊仙

盧生を榮華の夢へと誘う枕は、「枕中記」のような中国説話に登場する枕と基本的には同一のものである。しかし、伊藤氏が指摘するように《邯鄲》の夢中の榮華は「枕中記」と異なり、非常に劇的な描写となっている。結論を先に述べると、このずれ、すなわち原拠である「枕中記」の夢中描写と比較した時の謡曲の特異性は背景となる説話の相違によって起こるものと指摘したい。

そもそも中国説話における夢の枕には、「枕中記」系の夢の枕と、「遊仙枕」系の夢の枕とが存在するように思われる。すなわち「枕中記」系の枕とは謡曲以前の邯鄲譚に登場するような、現実的な榮華の夢を見せる枕である^②。「枕中記」の枕は謡曲のように仙界の夢を見せたりはせず、ただ俗世での立身出世の夢を見せる。対して「遊仙枕」系の枕は主に唐の玄宗皇帝にまつわる説話に登場する。玄宗皇帝は遊仙関係の説話を多くもつ人物だが、特に「遊仙枕」に関する最も有名な話に「開元天宝遺事」巻上の記事が挙げられる。以下に原文を引用する。

幽茲國進奉枕一枚其色如瑪瑙温々如玉其製作甚樸素若枕之則十例三嶋四海五湖盡在夢中所見帝因立名為遊仙枕^③

亀茲(きゅうじ) 国「都城は現在のウイグル自治区サヤ県」が枕を一つ献上してきた。瑪瑙(めのう)のような色をしており、玉の

ように柔和で、きわめて素朴な造りである。それを枕にして眠ると、十州三島をすべて夢のなかで見ることができるとする。皇帝がそれにちなんで遊仙枕と名づけた、とする^⑤。

つまり「遊仙枕」とは仙界の夢を見せる枕であって、その出自からして皇帝と密接に繋がっているモチーフである。《邯鄲》の枕は、原拠である「枕中記」系の夢の枕よりも「遊仙枕」系の枕に基づいているのではなからうか。謡曲では入眠直後に盧生の即位が起こり、都城の繁榮、仙家の歡樂の描写が続く。中でも盧生が天の濃漿を飲むことを契機とする仙家の歡樂描写は、「各曲解題」も指摘するように神仙思想における樂園的性格が非常に強い。このような夢は「枕中記」の現実的な夢よりも「遊仙枕」が見せる樂園の夢により近いと言える。さらに「遊仙枕」は帝王遊仙を背景にもつため、従来謡曲において原拠とのずれと指摘されてきた、即位後に登仙が実現するという展開の必然性を説明しうるのである。

では「遊仙枕」は日本においてどの程度受容されていたのだろうか。これについては資料が少ないのだが、受容の一応の証左として五山僧の月舟寿桂(一四六〇―一五三三)『幻雲詩稿』第二にある「遊仙枕」の題をもつ漢詩文を挙げておく。

一枕仙遊青畫長 十州三島黑甜鄉 明皇未識神山路 只愛春風睡海棠^⑥

また問題でもう一絶がある。

弱流萬里枕頭寛 従是三郎夢不醉 五十年間天下定 割蓬山置

泰山安

芳賀幸四郎氏によれば、禅僧の間に詩的ファンタジーとしての仙境へのあこがれがあり、この詩もそういった背景の中で詠まれたものであるという^⑦。この漢詩の成立は《邯鄲》の成立より後ではあるが、中世における「遊仙枕」説話の受容の一例として挙げておきたい。

一方で《邯鄲》には「遊仙枕」以外にも盧生に玄宗皇帝の説話を重ねる表現が見受けられるので、次節ではそれを指摘してみたい。

(二) 霓裳羽衣曲起源説話について

盧生が菊水を飲んだ後、登仙を遂げる際の《邯鄲》の一節に以下のものがある。

月人男の舞なれば、雲の羽袖を重ねつつ、喜びの歌を、歌ふ夜もすがら^⑧、

この部分について、新編日本古典文学全集は「雲の羽袖」を「月」の縁語。成語「雲の端」により、「雲の」は「羽袖」の序。「と注し、単に修辭上の問題として説明している。もちろん「羽袖」の表現は他の謡曲中にも頻出するのだが、前節で指摘したように、

「遊仙枕」説話を背景として《邯鄲》の帝王遊仙を考えると、盧生が「月人男」に例えられたことはもう少し重要な意味を持つのではないか。

つまりこの一節の背景には玄宗皇帝遊仙説話のひとつ「霓裳羽衣曲起源説話」が存在しており、盧生その人に玄宗皇帝像を重ねられていると考えられる。「霓裳羽衣曲起源説話」の国文における初出は『十訓抄』第十篇六七話^⑨で、唐の玄宗皇帝は月を愛する気持ちが深かったが、皇帝の志に感動した道士の導きによって月世界に入り、そこで覚えた曲が「霓裳羽衣曲」であるとす。ここでの月世界の表現は以下のように楽園のごとき神仙世界の描写が展開されており、印象としては《邯鄲》に近いものを感じさせる。

玉の宮殿、玉の樓閣、数知らず。舞台の上に、十二人の妓女舞ふ。おのおの白衣を着たり。楽の聲、舞ひのすがた、のどかにすめば、玉を動かすかんざし、雪を廻らす袖、みなひかりかかやけり。

二階の宮殿あり。薨ごとに玉をみがきて、目もあてられず。玉の簾を上げて、一人のあるじ、これを見る。すべて、ものの音、舞の姿、ところのありさままでも、心も及び給はず。斧の柄も朽ちぬべくおほされけれど、名残惜しながら、舞だに見はてずして、帰り給ひにけり^⑩。

また言うまでもなく「霓裳羽衣曲」は、「長恨歌」に詠まれたことでも知られる舞曲であり、玄宗皇帝との関連が容易に想起されるモチーフである。このように考えてくると、謡曲《邯鄲》の「月人男の舞」を「霓裳羽衣曲起源説話」と結びつけることはあながち無理ともいえないのではないか。前節で指摘したように、この作品の主要モチーフである「夢の枕」もまた玄宗皇帝に強く関連付けられる「遊仙枕」を背景としているとするならば、「月で舞曲を覚えた帝王」である玄宗皇帝像を「月世界で（雲の羽袖をかさねて）舞う盧生（帝王）」に重ねるのはごく自然なことと考えられるからである。

以上のように、他の「邯鄲譚」との展開の差異が指摘されていた《邯鄲》の帝王遊仙モチーフは、玄宗皇帝が盧生に重ねられていると見ればそれほど不自然な点なく説明が可能かと思われる。

四 《邯鄲》の四方四季描写

四方四季とは一所に四季の風景を現出させるといふ表現形式で、多くの場合春夏秋冬が東西南北に対応させられる。特に御伽草子に多用され、異界の不老不死性、永遠性を示すサインとなる表現である。^⑪

《邯鄲》における四方四季の描写も、盧生が天の濃漿を飲み昇仙

を果たした月世界、つまり異界の描写として現れ、この描写の直後に盧生の覚醒が起こる。以下にその部分を引用する。

月人男の舞なれば、雲の羽袖を重ねつつ、喜びの歌を、歌ふ夜もすがら 歌ふ夜もすがら、日はまた出でて、明らかくなりて、夜かと思へば、昼になり 昼かと思へば、月またさやけし、春の花咲けば 紅葉も色濃く、夏かと思へば、雪も降りて、四季折々は、目の前にて、春夏秋冬、万木千草も、一日に花咲けり、面白や、不思議やな。かくて時過ぎ、頃去れば、五十年の、栄華も尽きて、まことは夢の、中なれば、皆消え消えに失せ果てて、ありつる邯鄲の、枕の上に、眠りの夢は、覚めにけり。いかにお旅人、粟のおだいが出来て候。疾う疾うおひるなれや。このような超自然的な仙界描写から一気に覚醒へと至る流れは、「枕中記」にはない《邯鄲》特有の表現だと伊藤氏は説明している。所謂邯鄲譚をモチーフとした先行作品中で、《邯鄲》の表現が特有のものであることに異論はない。しかし以下に述べる、四方四季の崩壊が異界の崩壊を示すサインとなるといふ中世の御伽草子に見られる表現形式をここに当てはめるとするならば、引用部分の表現はそれほど不自然なことではない。

四方四季の崩壊と異界の崩壊については、勝俣隆氏に詳しい論考がある。^⑫勝俣氏は『酒吞童子』に関連して、四方四季の美意識は京

都を中心にした貴族的な「雅び」な美意識であるとしながら、次のように述べる。

そして、現実の世界ではなかなか実現できない美しく不思議な世界観を実現させているところが、人間世界ではない「異郷」の「異郷」たる所以なのである。その異郷を現出させているものは、場合によっては魔術的なもので、鬼のもつ摩訶不思議な力、神通力による場合があった。それ故、酒吞童子のように、鬼が退治される話では、鬼の退治と同時に、その「雅び」な世界も崩壊してしまうのである。

ここで氏が引用する大東急記念文庫蔵『しゆてん童子』（伊吹山系）の四方四季崩壊場面は以下のようなものである。

とうしかありし時、きん銀をちりはめ七ちんまんはうをあちきみたりしとみへしも、みな一とときにきへうせぬ。はる夏秋ふゆのおもしろかりし所も、た、かんくつそのひえたるはかり也。このような表現は《邯鄲》の覚醒へと至る部分とよく似通っているといつていいのではないだろうか。

ただし、「酒吞童子」は《邯鄲》よりも百年ほど時代が下ったものである。では《邯鄲》以前に成立した作品で、四方四季の描写が仙界を表すサインとなっている表現にはどのようなものがあるのだろうか。

新編日本古典文学全集の頭注が指摘するのは、『曾我物語』巻一「費長房が事」の表現である。この段はいわゆる壺公の故事と呼ばれるもので、仙術を極めた費長房が未だ昇仙叶わぬままにいたところ、腰に壺を下げた老人に出会い、その壺の中に入れてもらう。壺の中には仙界が広がっており、四方四季が現れるのはこの部分である。ここでは「この壺のうちをめたき世界有、月日の光は空にやはらぎ、四方に四季の色をあらはし、百二十丈の楼閣あり、天にて聖衆まひあそぶ。梟・雁・鴛鴦の聲やはらかにして、池には弘誓の船をうかべり」というように壺の中に飛びこんだ瞬間に場面が切り替えられ、異界のサインとしての四方四季が描写される。¹⁵

《邯鄲》の夢中描写を考える場合、そもそも『和漢朗詠集』で同じ詩に詠いこまれ、邯鄲譚と近接性を持つ壺公の故事の遊仙描写にはやはり若干の注意を払っておいてよいだろう。壺に飛び入ることと遊仙に導入する壺公の故事の表現が、謡曲と先行邯鄲譚との相違点のひとつである入眠後の歓楽描写への劇的な導入に何らかの影響を与えた可能性もあるからである。

一方《邯鄲》が提示した遊仙描写が、『しゆてん童子』に見られる四方四季の崩壊と異界の崩壊を連動させる表現へ繋がっていくとも考えられる。というの以下に述べるように、《邯鄲》が祝儀物御伽草子に影響を与えた形跡が認められるからである。

五 《邯鄲》《鶴亀》と祝儀物御伽草子

第三節において謡曲《邯鄲》の背景に「玄宗皇帝遊仙說話」が在するのではないかと指摘したが、これを視野に入れて、謡曲《鶴亀》の冒頭部分を見てみよう。

かやうに候ふ者は、唐土玄宗皇帝に仕へ申す官人にて候。この君賢王にましますにより、吹く風枝を鳴らさず民戸ざしせず、まことにめでたき御代にて候。さるほどに四季の節会の御政意り給はず、おびただしき御事なり。すなはち当春も舞樂を奏し、千年丹頂の鶴、万歳緑毛の亀までも、舞ひ遊び、まことにめでたき御政にて候。それにつき今日は君月宮伝へ行幸あるべきとの恩事にて候ふ間、皆々この殿へ参内申され候へ、その分心得候へ、心得候へ。

謡曲《鶴亀》は下掛り系古異称《月宮殿》で、喜多流はこれを正式名とする協能である。「いろは作者註文」に曲名が見え、天文二十二年（一五五三）九月、石山本願寺で春日大夫上演（証如上人日記）。成立は天文ごろをあまりさかのぼりえぬとされる。引用部分について新編日本古典文学全集の頭注は以下のように述べる。

この曲の帝王を唐の玄宗と定めているのはアイのせりふであり、謡曲には述べられていない。したがって、極言すれば、この曲

のシテは賢王であればだれでもよく、アイのせりふ次第である（和泉流では「夏の兔帝」）。ただ、月の都に赴き「霓裳羽衣ノ曲」を下界に伝えたという伝説をもつ玄宗は、他の帝王よりは本曲のシテにふさわしい。

また《鶴亀》の「月宮殿」の描写は次のようなものである。

月宮殿の、白衣の袂、月宮殿の、白衣の袂も、いろいろ妙なる、花の袖、秋は時雨の、紅葉の葉袖、冬は冴え行く、雪の袂を、翻す衣も、薄紫の、雲の上人の、舞樂の数々、霓裳羽衣の、曲をなせば、山河草木、国土豊かに、千代万代と、祝ひ給へば、官人駕輿丁、御輿を早め、君の齢も、長生殿に、君の齢も、長生殿に、還御なるこそ、めでたけれ。

西野春雄氏²⁰によれば、能《鶴亀》の成立時期は不明で、能としての成形を見たのは文献上、室町末期の天文ごろまで下るものの、構想には古体が残つてもいる。したがって文献上では《邯鄲》より遅れるとはいえ安易に影響関係をいうことはできないが、《鶴亀》に玄宗皇帝が祝儀性をまとして登場するという点には注目しておくべきであろう。なぜなら《邯鄲》の夢中栄華の描写が《鶴亀》と共に祝儀物御伽草子に取り込まれるという現象が認められるからである。謡曲《邯鄲》に以下のような詞章がある。

東に三十余丈に 銀の山を築かせては、金の日輪を出されたり。

西に三十余丈に、金の山を築かせては、銀の月輪を出されたり。たとへばこれは、長生殿の裏には、春秋をとどめたり、不老門の前には、日月遅しと、いふ心をまなばれたり

次に御伽草子『不老不死』『つるかめまつたけ』を引用する。なお『不老不死』は『鶴亀』との影響関係はなく、『つるかめまつたけ』の『邯鄲』『鶴亀』との類似については既に指摘がある^④。

東にはこかねの日輪を、しろかねの山のうへに、三十よ丈の、はたほこの上につけて、西には白銀の月りんを、こかねの山のうへに、卅よ丈の、はたほこのうへに、かけたなり、門には不老門、殿には、長生殿と、かきたる額をそかけにける、みめうきれいの、しやうこんは、心もことはも、をよはれず^⑤（『不老不死』）

さるほとに、ひかしに三十よちやうの、こかねの山をつかせて、こかねの日りんをいたし、またにしに、三十よちやうに、しろかねの山をあらはして、おなしく、しろかねの月りんを、いたしたり

たとへばこれは、長生殿のうちには、春秋をとどめて、不老門のまへには、日月をそしと、いひけるも、かくやと思ひしられたる（『つるかめまつたけ』）

また『つるかめまつたけ』とほぼ同内容の『つるかめのさうし』にも以下の表現がある。

東に三拾よちやうには、白かねの山を、つかせつつ、こかねの日りんのいたし、西に三十よちやうには、こかねの山をつかせ、白かねの月りんの、いたしたまふ

たとへば、これは長生殿の裏には、しゆんしうをととめ、ふろうもんの前には日月おそしといふとも、かくやと、おもひしられたり

もつとも、このような一連の表現は『邯鄲』が初出ではなく、『平家物語』巻五の「咸陽宮」ほか、『曾我物語』巻二「泰山府君の事」や謡曲『養老』^⑥などにも類似の表現がみえる。なお「長生殿」「不老門」の部分はもと『和漢朗詠集』巻下「祝」の慶滋保胤の漢詩「長生殿裏春秋富 不老門前日月遅」^⑦の引用表現である。例として『平家物語』巻五「咸陽宮」を引用しよう。

内裏をば地より三里たかく築あげて、其上に建てたり。長生殿・不老門あり。金をもつて日を作り、銀をもつて月を作れり。四方にはたかさ四十丈の鉄の築地をつき、殿の上にも同じく鉄の網をぞ張つたりける^⑧。

確かに表現の大方では「咸陽宮」も『邯鄲』も御伽草子も大差はないのだが、細かい描写の流れをみると、後者二つは「咸陽宮」に比べ、『邯鄲』により類似しているといえる。これらの作品の間にはやはり何らかの影響関係が認められるとみていいだろう。

ただし《鶴亀》は帝王遊仙を単純な祝儀モチーフとして扱っており、詞章を取り込んだ御伽草子も、《邯鄲》に見られたような栄華の儚さ、人生の空しさを表現するという意図は見受けられず、「めでたさ」を強調するのみである。このような差異は《邯鄲》の祝儀性のみが強調されて御伽草子に取り込まれたために起こるのか、それとも《邯鄲》は祝儀的なモチーフを夢中描写に利用することによってこそ、栄華の儚さを演出しようとして試みているのだろうか。もし後者だとするならばそこに《邯鄲》の工夫がうかがえようが、この問題に関しては別稿に譲ることとしたい。

六 まとめ

以上の論から謡曲《邯鄲》には先行研究によって指摘されてきた以上の説話を取り込まれており、またこの作品が神仙思想的な楽園世界の描写を先取りする一面があったということが垣間見えたかと思われる。具体的に言えば第三節で論じた盧生と二重映しになる玄宗皇帝像とそれに関連する遊仙枕であり、あるいは第四節で論じた四方四季と異界の結び付け方の先取性がそれに当たる。

また《邯鄲》の祝儀性のみが独立したかたちで後続作品に影響を与えている可能性も見受けられ、興味深いところである。このような本曲の影響についての分析は未だ不十分な点も多いが、本曲は先

行する説話や表現を重層的にとりこみながら、先行の邯鄲譚とは違った新たな展開を見せている。謡曲《邯鄲》は日本における邯鄲譚の史的展開の一つの到達点として、重要な作品と位置づけられるのである。

注

- ① 伊藤正義「各曲解題」（伊藤正義校注『謡曲集 上』新潮日本古典成
新潮社 一九八三年）。伊藤論の引用は以下同書による。
- ② 「枕中記」の他に『太平広記』二八三卷「楊林」・二八二卷「核桃青
衣」など。
- ③ 他に「開天伝信記」「明皇雜録」に記事あり（汪涌豪・兪灝敏・鈴木
博訳『中国遊仙文化』青土社 二〇〇〇年）。
- ④ 長澤規矩也『和刻本漢籍隨筆集』第六集 汲古書院 一九七四年。
- ⑤ 袁珂・鈴木博訳『中国神話・伝説大辞典』大修館書店 一九九九年。
- ⑥ 上村観光編『五山文学全集』第三輯 帝国教育会出版部 一九三六年。
『幻雲詩稿』の引用は以下同書による。
- ⑦ 芳賀幸四郎『中世禪林の学問および文学に関する研究』芳賀幸四郎歴
史論集 思文閣出版 一九八一年。
- ⑧ 小山弘志・佐藤健一郎校注『謡曲集②』新編日本古典文学全集 小学
館 一九九八年。なお《邯鄲》の引用は以下、同書による。
- ⑨ 柳瀬喜代志「玄宗・月宮に遊ぶ」考——伝記・詩話所載「霓裳羽衣
曲譚」と『十訓抄』第十篇六七話（『和漢比較文学』九号 和漢比較文
学会 一九九二年七月）。
- ⑩ 浅見和彦校注・訳『十訓抄』新編日本古典文学全集 小学館 一九九
七年。

- ① 徳田和夫『お伽草子研究』三弥井書店 一九八八年。
- ② 勝俣隆「四季の描写と楽園象徴——宇津保物語から御伽草子まで」〔長崎大学教育学部紀要 人文科学〕六〇号 長崎大学教育学部 二〇〇〇年三月。
- ③ 勝俣隆氏前掲論文の翻刻によった。
- ④ 文献上での《邯鄲》初出は寛正五年（一四六四）四月五日〔札河原「勸進猿楽日記」〕。
- ⑤ 「日はまた出でて」以下の四方四季の仙界描写に付けられた注による（注8書）。
- ⑥ 『後漢書』『方術伝』『神仙伝』五に原拠。
- ⑦ 市古貞次・大島建彦校注『曾我物語』日本古典文学大系 岩波書店 一九六六年。
- ⑧ 「費長房が事」の記事は『曾我物語』真名本には見られないのだが、伊藤氏が同系統の資料が《邯鄲》に影響を与えたと指摘する、静嘉堂文庫本『和漢朗詠集和談抄』仙家「壺中天地乾坤外 夢裏身名旦暮間」の注には壺公の故事についても説明されている。
- 仍、帰ル蹤ヲ尋テ之ヲ見、老翁一ノ壺ノ中ニ飛入ル。長房モ連入
ニ、其ノ壺ノ中ニ別世界有テ人間ノ世界ニ非（伊藤正義・黒田彰
『和漢朗詠集古注釈集成』第三卷 大学堂書店 一九八九年）。
- だが『和談抄』においては四方四季の描写は現れない。
- ⑨ 小山弘志・佐藤健一郎校注『謡曲集①』新編日本古典文学全集 小学館 一九九七年。《鶴亀》の引用は以下同書による。
- ⑩ 西野春雄「作品研究『鶴亀』」〔観世〕四七巻一 号 一九八〇年一月。西野氏は寛衣羽衣曲に関連する「音楽説話を基礎として、その立体化を図るかたちで延年の大風流（例「玄宗皇帝月宮事」）が生まれ、やがて猿楽の能に変貌していったもの」と推定している。
- ⑪ 『日本古典文学大辞典』「鶴亀物語」の項を参照。ほか注22書の解題など。
- ⑫ 横山茂編『室町時代物語集 第五』井上書房 一九六二年。
- ⑬ 御位長生殿にさかへ、春秋をわすれて、不老門に、日月の影、しづかにめぐり（後略）（注17書による）。
- ⑭ 長生の家にこそ、老いせぬ門はあるなるに（後略）（小山弘志・佐藤健一郎校注『謡曲集①』新編日本古典文学全集 小学館 一九九七年）「養老」および『曾我物語』の該当箇所抽出は注25書四〇三ページを参照した。
- ⑮ 菅野禮行校注『和漢朗詠集』新編日本古典文学全集 小学館 一九九九年。
- ⑯ 梶原正昭・山下宏明校注『平家物語 上』新日本古典文学大系 岩波書店 一九九一年。なお該当箇所抽出は注8書《邯鄲》の頭注十二を参照した。